

こども科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）

総合研究報告書

低年齢児保育が子どもの発達等に及ぼす効果・影響の解明のための研究

令和6年度 分担研究報告書

「低年齢児保育における保育内容に関する保育者の意識と実態」

研究代表者 箕輪潤子 武蔵野大学・教授

研究要旨

本研究は、日本全国の保育施設（保育所・認定こども園等）を対象に、3歳未満の低年齢児保育の質に関する評価スケールの項目案を試作し質問票を送付した回答のうち、保育者の保育実践に関する意識と行動についての自己評価データを分析した。調査は2024年に5000施設へ自記式質問紙を送付しおよそ19.9%から回答を得た。0歳児・1・2歳児それぞれの保育について、「意識」と「行動」の観点から低年齢児保育を実施している保育所・認定こども園等の保育者が、保育実践においてどのようなことを重視し、実践しているのかを検討したところ、0歳児の保育では、主に子どもの生理的・心理的な欲求を満たすことと子どもの発達を支えることを、1・2歳児の保育では生活習慣の自立と他児とのかかわり、多様な発達を支えることが重視されていることが明らかになった。また、意識と行動で特に乖離が見られたのは、子どもの発達を支える環境を構成することに関する項目だった。この結果を踏まえ、低年齢児保育の質評価スケールのさらなる精緻化を行う。

A. 研究目的

乳幼児期に質の高い保育を経験することが子どもの発達等に良い影響を与えることや、保育への投資効果が高いことが海外の様々な研究により示されている（OECD, 2006, 2018, 2020 など）。特に、発達初期の応答的な関係性と良質な経験が脳の構造の強力な基盤を形成することが指摘されている（Center on Developing Child at Harvard University, 2016）。保育の質や保育実践は、社会・文化・歴史といった要因が基盤となって形成される。そのため、子どもたちの育ちの保障、育ちにおいて何を重視するのかは、相対的多元的であり、社会により変化すると言われている。例えば、国際比較調査の結果（OECD、2018 等）では、3～5歳児の保育実

践について、社会情緒的発達を促す実践に関する項目の「保育者は子どもの遊びに加わっているとき楽しそうにする」や、＜言語、リテラシー、数の発達を支え促す保育者の役割＞に関する項目の「保育者は、話をしたり聞いたりするときは 子供の目線に合わせる」の回答率が高く、日本で重視されていること等が明らかにされている。日本では子ども子育て支援新制度の施行以降、保育施設の量的な拡充が目指され、様々な経営主体の参入が起きたことで、低年齢児の保育実践の質が従来以上に多様化していると考えられる。そのため、「どのような経験や育ちが低年齢児にとって大切なのか」「子どもの経験や育ちにつながる低年齢児にふさわしい保育実践とはどのようなものか」（厚労省, 2021）といった観点か

ら、低年齢児の保育の質を問う必要があると考える。また、3歳以上とは異なる3歳未満児保育（低年齢児保育）固有の保育プロセスの質の精緻な議論が求められていることが指摘されている（秋田, 2020）

そこで、本研究は、日本で低年齢児保育を実施している保育所・認定こども園等の保育者が、保育実践においてどのようなことを重視し、実践しているのかについて質問紙調査を行い、保育実践に関する意識と実態について明らかにすることを目的とする。

B. 研究方法

(1) 調査対象・調査方法・調査期間・調査内容（※詳細は令和5年度報告書に記載）

調査対象施設については、厚生労働省「令和4年度社会福祉施設等調査」³⁾のデータを使用し、乳児保育を行なっている保育所5000施設を調査対象とした。郵送により配布し、返信用封筒を同封し回収を行なった。調査期間は令和6年2月14日～令和6年5月31日とした。

各施設には、保育者用、施設管理者用、施設の開所時間に関する質問項目の3種類の質問票を配布した。低年齢児保育プロセスの質に関わる質問項目の作成にあたっては、『保育所保育指針』『保育所保育指針解説』の「第1章総則 2 養護に関する基本的事項」「第2章保育の内容に記載されている事項」を参考にし、質問項目として答えやすいものになるよう内容や語尾の調整を行なった。『保育所保育指針』を参考にした理由は、子どもの発達過程と経験内容、子どもの発達過程に応じた保育者の環境構成や援助・留意事項など、いわゆる日本の保育

の文脈に沿った形で、プロセスの質に該当するものが含まれていると考えたからである。なお、質問への回答方法については、「意識（大切だと思うか）」と「行動（実施しているか）」を分けて回答してもらう形式とした。

なお、質問紙では、「保育プロセスの質」に関する質問項目のほかに、「低年齢児保育の保育方針・保育観」「構造の質/実施運営の質」に関する項目についても尋ねると共に、低年齢児の保育の質に関して自由記述での回答を求めた。

(2) 分析方法

質問項目のうち、「低年齢時保育プロセスの質尺度(案)」の尺度項目を想定して項目を設定した「低年齢児保育の意識と行動に関する項目（0歳/1・2歳）」への回答について、SPSSにおいて記述統計を行うと共に、意識と実態のt検定を行なった。

※項目の因子分析結果は（分担者：今福理博）を参照

<倫理的配慮>

質問票調査については、質問票の表紙に利用目的ならびに、データ処理において園や個人が特定されないようにすることを記載した。なお、武蔵野大学教育学部倫理委員会の承認を受けている（承認番号 R6-002）。

C. 研究結果

低年齢児保育プロセスの質に関する質問項目については、保育実践に関する意識に加え実態についても尋ねた。

1.0 歳児の保育実践についての意識と実態

0 歳児担任の回答の、「意識（大切にしている）」においては、23 項目中 22 項目で高く評価されていた。特に高かった項目は、食事に関する 2 項目・睡眠に関する項目 1 項目、排泄や着脱に関する 1 項目、社会情緒的な関わり（保育者との関わり）に関する 1 項目であった。食事・排泄・睡眠・着脱といった生活場面・生理的欲求に関わる項目 7 項目のうち 4 項目は評価が高かったことから、特に「生理的・心理的な欲求を満たす」ことが大切だと考えられていることが示唆される。

「実態（実際に行っている）」に関して高く評価されていたのは 4 項目であり、食事に関する 2 項目、排泄に関する 1 項目、社会情緒的な関わり（保育者との関わり）に関する 1 項目は、「意識（大切にしている）」において高く評価された項目と同じ項目であり、「生理的・心理的な欲求を満たす」かかわりを実際に行っていると認識していることがわかる。あとの 1 項目は、社会情緒的な関わり（他児との関わり）に関する項目であった。

意識と実態に乖離があった（0.5 ポイント以上）項目は、11 項目であった。意識と実態に乖離があった項目の内容としては、安心感の保障やくつろぎに関する項目、生理的欲求やリズムの尊重に関する項目、身体発達を支える環境に関する項目、子どもの発達過程に応じた玩具や環境に関する項目、子どもの興味や好奇心・感覚を豊かにする環境に関する項目であった。

<1・2 歳児>

1・2 歳児担任の回答の、「意識（大切にしている）」においては、30 項目中 26 項目で

高く評価されていた。特に高かった項目は、衣類の着脱や排泄に関する 3 項目、社会情緒的な関わり（保育者との関わり・他児とのかかわり）に関する 3 項目、言葉の発達に関する 2 項目であった。このことから、「生活習慣の自立と他児とのかかわり・言葉への援助」が重視されていることがわかる。

「実態（実際に行っている）」に関して高く評価されていたのは言葉の発達に関する 2 項目と、社会情緒的な関わり（他児とのかかわり）に関する 1 項目項目であった。これらの項目は、「意識（大切にしている）」において高く評価されていた項目と共通している。

意識と実態に乖離があった（0.5 ポイント以上）項目は、21 項目であった。乖離があった項目の内容としては、安心感の保障に関する項目、生理的欲求やリズムの尊重に関する項目、身体発達を支える環境に関する項目、社会情緒的な関わり（大人との関わり・他児との関わり）に関する項目、子どもの発達過程に応じた玩具や環境に関する項目、子どもの興味や好奇心・感覚を豊かにする環境に関する項目・表現に関わる項目であった。

以上の結果から、0 歳児の保育では、主に子どもの生理的・心理的な欲求を満たすことと子どもの発達を支えることを、1・2 歳児の保育では生活習慣の自立と他児とのかかわり、多様な発達を支えることが、低年齢児の保育プロセスの質に関わる要素であると考えられる。

D. 考察

0 歳児の保育では、主に子どもの生理的・心理的な欲求を満たすことと子どもの発達

を支えることを、1・2 歳児の保育では生活習慣の自立と他児とのかかわり、多様な発達を支えることが、低年齢児の保育プロセスの質に関わる要素であると考えられる。

ただし、0 歳児担任、1・2 歳児担任共に「意識(大切に思うか)」と「行動(実施しているかどうか)」の点数に差が見られ、保育の中で大切にしたいと思いつつも実際には思うようにはできていないこともあることが示唆される。特に、生理的欲求や生活習慣の自立よりも、子どもの発達を支える環境を構成することに関する項目でその傾向が見られている。このことから、幼児期以降につながる経験や育ちのための環境構成が低年齢児保育の現場においては課題となっている可能性が示唆される。

E. 引用文献

秋田喜代美・箕輪潤子・高櫻綾子 (2007) 保育の質研究の展望と課題. 東京大学大学院教育学研究科紀要 47, 289-305

秋田喜代美・佐川早季子 (2012) 保育の質に関する縦断研究の展望. 東京大学大学院教育学研究科紀要. 51, 217-234.

秋田喜代美 (2020) グローバル社会に向けた日本の保育のこれから . 保育学研究 58(1), 135-141.

OECD 2006 *Starting Strong II: Early Childhood Education and Care*. OECD Publishing: Paris.

OECD (2018) 国際幼児教育・保育従事者調査2018「保育の実践に関する保育者の意識」について (概要)

G. 研究発表

1. 論文発表

2. 学会発表

箕輪潤子・猪熊弘子・堀科・菅井洋子「低年齢児保育に関する保育者の認識 (1)

— 保育内容に着目して—」日本保育学会第78 回大会 ※R6 年度末時点で発表予定

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

表1 0歳児クラスの保育者の保育実践についての意識と行動

	0歳児	意識	行動	差分
1	一人一人の子どもがぐっすりいであらゆることに慣れ、心身の疲れが癒されるようにしている。	1.78	2.43	0.65
2	一人一人の発達過程をふまえて、はう、立つ、歩くなど、十分に体を動かせるように、空間を確保し、環境を構成している。	1.66	2.24	0.58
3	子ども一人一人がその発育に応じて、はう、立つ、歩くなど、十分に体を動かすことの楽しさを日常的に経験できる。	1.64	2.1	0.46
4	子どもの個人差に応じて授乳を行い、それぞれの家庭の状況や子どもの発育状況を考慮して慎重に離乳を進めている。	1.54	1.79	0.25
5	子どもたちが様々な食品に少しずつ慣れ、食べることを楽しめるように言葉掛けや介助の仕方を工夫している。	1.55	1.92	0.37
6	生理的・心理的欲求が満たされ、心地よく食事ができるよう、子どもたちの状態を汲み取り、一人一人のペースを尊重しながら援助をしている。	1.6	2.11	0.51
7	子ども一人一人の生理的なリズムをふまえて、食事や午睡の時間を設定している。	1.76	2.3	0.54
8	子どもたちがしっかりと寝て起きられるよう、静かで安心して眠れる場所を設けている。	1.57	2.02	0.45
9	子どものプライバシーが守られた状態でおむつ交換や衣服の着脱などができるよう、環境を配慮している。	2.05	2.78	0.73
10	おむつ交換や衣服の着脱などにおいて、子どもの感覚や気持ちに伴う言葉がけをするなど、清潔になることの心地よさを感じられるように関わっている。	1.6	1.9	0.3
11	一人一人を尊重し、温かい雰囲気の中で、たとえ思い通りにいかない様子の時にも、その思いや欲求をありのままに受け止めて関わっている。	1.67	2.28	0.61
12	子どもの声や表情、体の動きなどから欲求を汲み取り、子どもの欲求に応じた応答的な触れ合いや言葉がけをしている。	1.61	2.06	0.45
13	子どもが他の園児など身近な人の存在に気付き、親しみの気持ちを表せるよう、生活や遊びの中で声を掛けて仲立ちしている。	1.65	1.97	0.32
14	身近な生活用具、玩具、絵本などを手の届くところに用意し、子どもの興味や好奇心をかきたてる物的環境を構成している。	1.93	2.71	0.78
15	子どもたちが気づいた音やささやかな動きなど、周囲の事象の美しさや不思議さや魅力に対し、共感的に応えている。	1.74	2.11	0.37
16	生活や遊びのなかで様々なものに触れ、音や形、色、手触りなどに気付き、感覚の働きを豊かにする環境を構成している。	1.88	2.55	0.67
17	絵本を読んでもらっている時に、自らめくったり声を出したりする姿に温かく応じ、子どもが味わう世界を共有している。	1.68	2.04	0.36
18	絵本を見るときには、子ども一人一人と関わり落ち着いた優しい声でその世界に触れられるようにしている。	1.69	2.15	0.46
19	子どもの発達過程や興味を考慮した絵本や玩具を選んでいる。	1.72	2.32	0.6
20	子どもが、手指を使い身の回りのものをつまむ、つかむ、たたく、引っ張るなどする中で、変化する面白さやじっくり関わる喜びが得られる環境を構成している。	1.88	2.61	0.73
21	一人一人の子どもの発達過程や興味、関心を理解し、それに沿って子どもの探索活動が盛んになるような環境を構成している。	1.88	2.63	0.75
22	子どもが機嫌よく保育士とのふれあい遊びを楽しめるよう、表情豊かに関わっている。	1.52	1.82	0.3
23	歌やリズムに合わせて、手足や体を動かして楽しめるような経験が十分にできるように環境を構成している。	1.69	2.14	0.45

表2 1・2歳児クラスの保育者の保育実践についての意識と行動

	1歳児	意識	行動	差分
1	一人一人の子どもがくつろいで共に過ごし、心身の疲れが癒されるようにしている。	1.94	2.66	0.72
2	子ども一人一人の生理的なリズムに沿った生活ができるように配慮している。	1.85	2.54	0.69
3	走る、跳ぶ、のぼる、押す、ひっぱるなど全身を使う遊びを楽しめるような活動や環境を整えている。	1.91	2.06	0.15
4	子どもが様々な食品に慣れ、ゆったりとした雰囲気の中で食事や間食を楽しめるよう援助している。	1.81	2.48	0.67
5	子どもが身の回りを清潔に保つ心地よさを感じ、その習慣が少しずつ身に付くように援助している。	1.69	2.12	0.43
6	衣服の着脱に関して、子どもが自分なりに工夫して取り組みとする気持ちを尊重して、ゆとりをもって見守っている。	1.69	2.42	0.73
7	子どもが便器での排泄に慣れ、必要に応じて自らトイレに行けるよう援助している。	1.78	2.27	0.49
8	子どもが保育士等や周囲の子ども等との安定した関係の中で、共に過ごす心地よさを感じられるように、一人一人の内面に思いを寄せ、援助している。	1.61	2.23	0.62
9	子どもの欲求を適切に満たし、安定感をもって過ごせるよう、一人一人の発達の違いを考慮した上で、受容的・応答的に関わっている。	1.67	2.34	0.67
10	身の回りに様々な人がいることに気付き、徐々に他の子どもと関わりをもって遊べるよう援助している。	1.79	2.33	0.54
11	一人一人が十分に自己を発揮しながら、生活における様々な場面で他の子どもと多様な関わりがもてるようにしている。	1.85	2.46	0.61
12	子どもが充実した生活や遊びの中で経験を積み重ねることで、きまりの大切さを子どもなりに感じられるよう援助している。	1.83	2.38	0.55
13	生活や遊びの中で、子どもが他の年齢の子どもの存在を感じ、互いに関わりを楽しめるように援助している。	1.92	2.53	0.61
14	子どもが探索活動等を通して見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚の働きを豊かにしていけるような環境を整えている。	2.03	2.83	0.8
15	子どもの発達状態に応じて、適切な玩具や絵本、遊具などを用意している。	1.9	2.73	0.83
16	子どもが身の回りの物に触れる中で、形、色、大きさ、量などの物の性質や仕組みに気付けるよう援助している。	2.14	2.86	0.72
17	子どもが身近な物や場所について、愛着や親しみの気持ちを持てるよう援助している。	2.01	2.52	0.51
18	子どもと共に身近な動植物を実際に見たり、触ったりしている。	2.14	2.86	0.72
19	季節の変化を感じ取ることができるようにするとともに、季節感を取り入れた生活を楽しめるような工夫をしている。	1.98	2.64	0.66
20	子どもが自分の欲求や気持ちを、一語文や指差し、身振りなどで伝えようとする姿をよく観察して関わり、話しかけている。	1.63	1.94	0.31
21	日常の挨拶をはじめとして生活や遊びの中で丁寧に温かく言葉をかけながら関わるよう心がけている。	1.58	1.99	0.41
22	言葉の音やリズムの響きの面白さを楽しんだり、身体で表現して遊んだりすることにつながるよう、絵本や紙芝居を読んでいる。	1.74	2.13	0.39
23	子どもがやりとりを楽しみ、イメージが広がっていくように、ごっこ遊びなどの中で応答的に関わっている。	1.76	2.25	0.49
24	子どもが生活や遊びの中で友達との言葉のやりとりを楽しみ、友達との関わりが広がるよう仲立ちをしている。	1.69	2.08	0.39
25	子どもが安心して保育士等や友達に自分の思いを表現できるよう、配慮している。	1.6	1.99	0.39
26	子どもが様々な状態の素材（水、砂、土、紙、粘土など）に体で直接触れ、感触を十分に味わい楽しめるように援助している。	1.84	2.51	0.67
27	音楽やリズムにあわせて歌い、体を揺らす、飛び跳ねる、手や足でリズムをとる等の体の動きと一緒に楽しみ、関わっている。	1.79	2.25	0.46
28	子どもの発見や感動を受けとめ関わることで、生活の中の様々な音、形、色、手触り、動き、味、香りなどに気づき、感じることを楽しめるようにしている。	1.96	2.6	0.64
29	子どもが保育士等の話や、経験した出来事を通して、生活や遊びの先のイメージや見通しが広がるように関わっている。	1.98	2.59	0.61
30	子どもが生活や遊びの中で興味のあることや経験したことなどを自分なりに表現できるよう援助している。	1.95	2.54	0.59